

## 第30回すかがわ国際短編映画祭

中山 秀一

今年も「すかがわ国際短編映画祭」が5月12～13日にかけて開催され、今回で30回という大きな節目を迎えた。映画祭の創立者は、短編映画の製作会社「金山プロダクション」の初代社長・金山富男氏である。

彼はこの須賀川の出身で、地元関係者の協力のもと、このような短編映画専門の国際映画祭を立ち上げた。現在ではご子息の金山芳和氏が社長を引き継いで、映画祭の東京実行委員代表も務めておられる。

なお、この須賀川市は、映画ゴジラの特撮監督で、世界的にも有名な円谷英二氏の出身地でもあり、映画とは縁が深い「すかがわ」である。

筆者は、この映画祭に10年以上前から毎年参加して取材記事を書いている。その間、何と言っても大きな事件は東日本大震災で、須賀川は内陸なので津波の被害こそなかったが、建造物の被害は大きかった。市役所もその例に漏れず、業務の一部を映画祭の会場である文化センターに分散移行して市民サービスを続けた。その市役所が神殿を思わせるような新庁舎に生れ変わり、昨年より業務を開始している。

では映画祭の方はというと、大震災にもめげず、地震発生の11年と翌12年には、会期を5月から秋の開催にずらして危機を切り抜けた。

さらに、すかがわの銀座通りである「松明通り」に面し、広大なコミュニティ施設「tette」が建設中で、来年の1月にはオープン予定だ。「tette」の意味は、「手っ手」お互いに手と手をつなぐという、コミュニケーションを象徴する名称だ。そしてイタリア語の「tette」は、母親の「おっぱい」という意味の幼児言葉で、この施設のコンセプトをよく表現している。

一方被害を受けた多くの神社仏閣は、ほ



新装なった市庁舎・昨年から市民サービスを始めた



来年1月開館を目指して工事が進む「須賀川市民交流センター“tette”」



竣工まで242日!「なかよし」の幼児が見守っている



旧墓地の倒れた墓石、区画整理の告示が出ている



開会宣言をする堀江祐介 開会の挨拶をする橋本克也  
映画祭実行副委員長 須賀川市長

とんど復興しているが、墓地では倒れた墓石が折重なって悲しみを誘う姿が多い。壊滅的な被害を受けた旧墓地地区では、区画整理する旨を告示するお寺も見られた。

来年の映画祭には、環境施設が完備されて、第31回に相応しい、新たな「すかがわ映画祭」が誕生しているに違いない。

## ☆今年の上映作品

上映作品は、この映画祭の特質として、極めて広いジャンルにわたっている。ドキュメンタリー、ミニドラマ、アニメーション、伝統文化記録、学術記録等々である。それらは文化の異なる海外作品を含めると更に多彩な作品群となる。

そのような環境のもとに、今年の作品は国内作品が22本、海外作品が11本、合計33本が2日間にわたり上映された。なお、今年の上映には、第21回2009年にゲストトークと共に上映して、広いホールを満席にした『つみきのいえ』（第81回アカデミー賞 短編アニメーション賞受賞）がアンコール上映された。



ポータン君の「てって」をとって開会の挨拶をする深谷育子映画祭実行委員長



初日午後の幕開けには地元の「奥州須賀川松明太鼓保存会」が勇壮な演奏を披露して会場の雰囲気盛り上がった



地元に関する話題で満席の観客が盛り上がった



左から尾上克郎、庵野秀明、樋口真嗣の皆さん（敬称略）

何と言っても「すかがわ」は、特撮の世界的な天才円谷英二監督の出身地で有名である。メインストリートの「松明通り」には、ウルトラマンなどのキャラクターがモニュメントとなって歩道に飾られ、通行人を和ませている。

そのような環境で、第30回を迎えた映画祭は、特撮の監督3名を迎えてゲストトークが行われた。

初日の午後一番、主催者側から開会の挨拶あり、続いて今日のゲストが携わった特撮作品が2本『巨神兵東京に現わる』と、そのメイキング映像『巨神兵が東京に現われるまで ミニチュアで見ると昭和の技』が上映された。

ゲストの庵野秀明氏は、企画・製作・脚本を、樋口真嗣氏は監督を、尾上克郎氏は監督補・特殊技術総括を担当されている。

『巨神兵東京に現わる』日本、2012年、9分03秒

この作品は、展覧会「館長 庵野秀明 特撮博物館 ミニチュアで見ると昭和の技」の展示映像として制作された特撮短編映画である。この展覧会は、東京都現代美術館で2012年7月10日～10月8日まで開催され、その後各地を巡回展示された。

宮崎駿の『風の谷のナウシカ』に登場する、巨大な人型の人工生命体・巨神兵が、現代の東京に現れ街を破壊する様子を、伝統的なミニチュア特撮技術を駆使して描いている。

東京都心の空を火の粉のようなものが風によってビルの谷間に吹き抜け、人々に不



© 2012 Studio Ghibli

吉な予感がよぎる。やがて巨神兵という巨大な妖怪が、東京上空を覆うように現れると、雲のように街の日差しを遮る大きさを。やがて、仁王立ちになった妖怪は、口から強力な光線「プロトンビーム」を発射して、ビル街を破壊し、東京タワーをなぎ倒し、下町の木造家屋を焼き尽くす。

『風の谷のナウシカ』にある「火の7日間」に従って韻を踏むように、字幕とともに破壊の映像が進んで行くのが、哲学的なものを感じさせて印象的だ。

『巨神兵が東京に現われるまで ミニチュアで見ると昭和の技』日本、2012年、15分16秒

特撮短編映画『巨神兵東京に現わる』のメイキング映像で、『巨神兵東京に現わる』と同様に、展覧会「館長 庵野秀明 特撮博物館」の展示映像として制作された。CGを使わずに、ミニチュア特撮のみでの表現に挑戦するスタッフたちの、楽しそうな姿が記録されている。往年の特撮技術のみでなく、ビル崩壊シーンなどでは新しい技術も開発された。

このメイキング版は最高に面白い。上記『巨神兵東京に現わる』を制作する過程をドキュメンタリー風に記録している。CG全盛の今日だが、これは徹底的に手作りの作業にこだわり、スタッフたちは楽しそうに



© 2012 Studio Ghibli

ミニチュアセットや、ビル破壊や家屋の火災を仕掛ける装置を作っている。

圧巻は、何と言っても主役の巨神兵の制作だ。この主役は細身なので、ゴジラのように

に胴の中に人が入って動かすことはできない。そこで、頭と手足を動かすのに巨神兵の後ろから3人がかりで操ることに。これは「人形浄瑠璃文楽」の人形遣いの方式に似ているのがおもしろい。

文楽は遣い手の姿を消す必要がないが、巨神兵の遣い手は完全に消えなければならぬ。遣い手は巨神兵と重ならないように、青色の棒を介して、巨神兵とは離れて操る。そして、遣い手も全身ブルーのタイツ姿でブルーバック合成に対応する。この仕掛けを考案する初期の過程も描かれており、大変興味深い。

この作品を観ると、特撮スタジオで働く人たちが、皆楽しくてたまらないという表情で、しかも笑いが絶えない現場の雰囲気印象的だ。CGの制作現場と違って、ミニチュアの特撮現場は観客にも楽しい。

もちろん、この後に登壇するゲストトークの皆さんも、このメイキング版の中で大活躍されている方々である。

## ☆ゲストトーク

今見たばかりのメイキング版の画面で活躍されていたゲストなので、会場の観客たちもゲストの知人のような雰囲気である。ゲストの特撮に対するアナログ的な体験談に笑いが絶えず、大いに盛り上がった。さらに、地元の須賀川に特撮の展示館をもたらし計画も披露された。

## 《トークで語られたこと（要約）》

東宝などの特撮スタジオで、昔作られた膨大なミニチュアなどがゴミとして捨てられた。わずかに残されたものも保管の継続が難しいので、これらを活用したいと思った。そこで、スタジオジブリに相談した。

展覧会「特撮博物館」が開催され、文化



『SALIM BABA サリム父さん』  
裏町の子供たちはサリム父さんの映画に争って集まる



『ひいくんのあるく町』  
町の人気者“ひいくん”はヘルメットがトレードマーク



『A Sunday at 105 105 歳のある日曜日』  
105 歳とは思えない老婦人は人生訓を独白

庁の事業として、特撮に関する調査をすることになった。難しかったのは、いまだに特撮というものがちゃんと定義されていないことで、いったい特撮とは何ぞや、という定義づけから始めた。

2013年、森ビルさんから特撮のイベントをやらないかという誘いがあり、須賀川市長に会って話をした。「特撮博物館」をやっているうちは良いが、終わったら展示物の保管場所が欲しい。そこに、市長から何とか協力するという書簡が届いて、我々は感動した。

円谷が作った東宝作品の『日本海大海戦』に使った戦艦三笠が残されている。これは5メートルほどの大きさで、50年近くも眠っていたものだ。

### 《すかがわに特撮を集結したい》

森ビルさんからの紹介で、すかがわのある場所を借りることができた。これで三笠の行き場所ができた。



『伸びゆくふるさと - 須賀川市の30年』



『須賀川、復興への歩み』



『時絵 室瀬和美 時を超える美』

2016年、文化庁に福島県からも働きかけて、2017年に、特撮文化を推進する実行委員会ができた。

近く、特撮の保管施設が出来るのは間違いない。特撮の楽しくて面白いところを、特撮文化として広めていこう！これは大きな動きになるに違いない。

昨年、初めて“特撮”というものが国に認められた。若い人が特撮に関心を持って、特撮による面白いものを作ってほしい。

すかがわに拠点が出来れば、われわれは何時でもやって来てお手伝い出来る。郷土の誇りとなるよう、これからの活動を広く知ってほしい。

トークで語られた内容は、地元すかがわに新たな特撮の保管施設が生まれるという希望の話題であり、ホールに来場した観客



『平成28年度工芸技術記録映画「竹工芸～藤沼昇の技」完成した花かご（東編花籃「宝珠」）この工程が撮影された。』



『Forest Guards 森の番人』  
ラトビア、2015年、アニメーション、12分

とゲストトークが一体となって、大いに盛り上がるひと時であった。

### ☆上映作品の紹介

『SALIM BABA サリム父さん』インド、2008年、ドキュメンタリー、14分30秒  
これは筆者のような古い映画ファンには、たまたまノスタルジーを満喫させてくれる作品だ。次元は違うが、イタリア映画『ニューシネマパラダイス』を思い出してしまった。アイラブフィルムという点で。

インドは世界一の映画大国だということはよく知られている。例の、ストーリーのなかで、突如として歌とダンスのシーンが現れる事でも有名だ。

このドキュメンタリーは、インドカルカッタで生まれ育った55歳の初老の男が、回顧録を語るような形式で展開する。その語りはインド語の詩を読んでいるようで、聞く耳に心地よい。

彼の名前はサリム・ムハンマド、家族は妻と4人の息子と2人の娘と1人の養子で、子どもたちは父親の仕事を手伝っている。

そのサリム父さんの仕事とは、手回し式の35mm映写機のヘッド部分を手押し車に乗せて、映画の紙芝居屋さんのように裏町を巡回している。映画は透過式の小さなスクリーンに映写するので、そのスクリーンには大きな黒布が覆ってある。子供たちはその大きな黒布をかぶって映画を観るのだ。

その子たちの嬉しそうな活き活きとした瞳を見ると、テレビの画面よりも粗末であっても、この素朴な映像が楽しいようだ。

実は、この映画版の紙芝居屋は、サリム父さんの父親の時代からやっているという。そして彼は、映写機のメンテナンスや映写のコツなどをすべて父親から教わった。さらに、上映フィルムのストックも父親から受け継いだ。しかしフィルムの痛みがひどく、痛んだ部分は切り貼りして修繕したり、廃棄処分になったフィルムを集めたりして、上映ソフトの補充をしている。

そして、息子たちも含めてモノ作りが器用だ。映写機の光源ランプは懐中電灯を改造、映写レンズは手相を見る虫眼鏡を利用して間に合わせている。

黒幕の中に見える映画のシーンが、いくつか紹介されるが、一丁前に歌と踊りのシーンが現れて、子どもたちも浮かれているのが楽しい。インドでは、日曜日には誰でも映画に行くので、どこの映画館も満員。しかし映画館に行けない裏町の子供たちは、サリム父さんの巡回映画に嬉々として満足げだ。

### 『ひいくんのあるく町』日本、2017年、ドキュメンタリー、47分

これは、日本映画大学学生の卒業制作として製作されたドキュメンタリーで、監督を務めたのは青柳 拓さんである。撮影場所は、青柳監督の出身地である山梨県西八千代都市川三郷町が舞台である。ちなみに、この町は和紙作りと花火で有名な山あいの町だ。

この町には“ひいくん”と呼ばれて、住民たちから親しまれている知的障害者があり、作品は彼の生活ぶりを中心に、町の人たちとの交流を温かい目で映像に記録している。このドキュメンタリーを観た第一印象は“清々しい”の一言である。

一般に学生の作品は、自己陶酔型・屁理屈型という作品が多いのが現実である。ところがこの作品は、監督自身の出身地で小さな町三郷町に住む「ひいくん」を中心に構成。彼と色々な人たちとの人間模様を、妙なテクニックを使わないで、素直に撮影

している。

さらに、ナレーションを監督自身が一人称で語っており、素人っぽいのが、かえって言葉の伝達力が良く、下手なプロのナレーターよりも感じが良い。

町のアイドル的な存在となっている“ひいくん”は、監督が小学生のころから有名だったらしい。知的障害者とは言っても、暴力を振るうようなことはなく、いつもヘルメットをかぶり、街の至る所に神出鬼没、お手伝いを買って出たりして愛嬌をふりまく。

町の福祉施設で1日5時間、商品の包装など単純な作業をしており、その後は独特の街歩きがはじまる。特に道具に興味があるようで、ホームセンターに出かけて工具を見て歩く。そして、店員が作業衣の整理をしていると、空いたハンガーを手渡したりのお手伝い。

“ひいくん”は、商店街にある床屋さんの家族だが、父親はすでに亡くなって、床屋の看板は下ろしており、母親と、姉さんとその娘の4人で住んでいる。母親は、“ひいくん”の幼い頃の写真を見せながら説明する。幼児の頃は、足腰も弱く特殊な靴を履かせるなど、母としての愛情を注いだことが語られる。結局どこの医者に行っても、原因が分らずじまいだったという。

このシーンを見ると、母親は特にためらうことなく、息子の障害者としての経緯を淡々と語っている。障害者でありながら、母親の自然体の対応が、町中の人たちにも好かれる“ひいくん”に育ったのだと思う。

この町の商店街もご多分に漏れず、シャッターを下ろした店が目立つ。昔は客で賑わった大きな家電製品の店もシャッターが閉まっている。主人は認知症でデイサービスに通っているが、家族も近所の人たちも認知症の主人を励ましている。

いよいよ夏休みも終わるころ、この町名物の花火大会が開かれ、夜空に散る花火が、この夏も終わりが近いことを感じさせる。

このドキュメンタリーは、町の人々を淡々と描いた“ひと夏の叙事詩”的な作品になっており、まことにあと味のよい印象だ。

### 『ASunday at 105 105歳のある日曜日』カナダ、2007年、ドキュメンタリー、13分20秒

カナダには「NFB National Film board of Canada」カナダ国立映画製作庁という国の組織があって、映画製作を支援している。

この作品もNFBによる製作で、105歳の老婦人のある日曜日を記録したドキュメンタリーだ。彼女はしっかりとした顔立ちで、とても105歳とは思えない体つき。草原に建つ平屋住宅に一人暮らし、家の中は杖なしで歩き、いつもの日課を普通にこなしている。

このドキュメンタリーは、彼女のひ孫が撮影したもので、これまでの長い人生で得た思いを、カメラに向かって語っている。それは観る者にとっては人生訓のような味わいを感じさせる。

ひ孫のカメラマンに向かって「おばあちゃんを使って稼ぐのかい、困った子だよ」と、開口一番先制パンチを食らわしたがとても嬉しそう。撮影を意識してか、それとも毎朝の日課か、鏡に向かって念入りに髪をとかし、さらに顔の化粧も忘れない。

彼女の名前はアルデア・ペリン・コルミエ。朝目が覚めたら胸に十字を切る、それが1日の始まりだ。朝食は自分で作るようだが、昼食などは、近くに住む親族が届けに来る。

彼女は2日だけ学校に行ったが、あとは自分で勉強したという。「だから知識がないの」と言いながら新聞を広げて読む。私もお月様に行ってみたいと思う。アメリカは月までも行ったが、宇宙の神秘がなくなった。「きっと神以上になりたいのよ、でもそうはいかない、出来っこない」「アメリカは他の国の問題に関わり過ぎる」等々、妙にタイムリーな政治談議まで飛び出す。

地獄なんて無い、地獄とはその人自身がつくるもの。聖書を開きながら回想する。不満なんかなかった、働くことが私の長所だった。働いてお祈りをして、一度だって信仰を諦めたことはない、

「与えられた時間はまだ少し残っていそうね」と寝酒のリキールを一気に飲んで、ああ強い！と言いのこして寝室に入った。

☆今回は、映画祭 30 周年を記念して、須賀川の記録映画が 2 本上映された。製作は 2 本とも須賀川市出身で映画祭の生みの親・金山プロダクションである。

1 本は須賀川市制 30 周年を記念して製作されたもので、昭和 29 年（1954）に市制が施行されてから、須賀川市 30 年の発展を追っている。もう 1 本は東日本大震災からの復旧・復興の歩みを記録した作品である。

### 『伸びゆく ふるさと - 須賀川市の 30 年』

日本、1984 年、ドキュメンタリー、31 分

筆者は、すでに 10 年以上、映画祭に通っているのだから、その間、周辺取材して歩いたり、少なからず当地の歴史文化に興味をもっている。大震災後の須賀川についても、その影響を見聞しているので、この両作品は須賀川市民と同様に興味を持って拝見した。

『～須賀川市の 30 年』は、筆者の知らない時代の映像だが、現在に至るまでの経緯が理解できて、興味深い内容である。映画祭の会場である文化センターがこの時代に建設され始めたことも知ることができた。

本来須賀川は福島県のほぼ中央にある町であったが、その後、周辺の 4 か村が須賀川町と合併して、昭和 29 年に市制が施行され、現在の「須賀川市」が誕生した。

以来、市庁舎を完成させ、水田を開いてコメの生産を上げ、東北自動車道、東北新幹線と共に工業団地を造成して工場の誘致も行った。

しかし、伝統のたばこ葉の育成、養蚕と絹糸産業が時代と共に変化し、その対応で野菜、梨、りんごなどのほか花の生産にも力を入れる。特に須賀川特産のきゅうりは東京でも知られており、東北自動車道の完成で、須賀川の野菜は東京方面に出荷されている。

郊外に出来た大駐車場付きのショッピングセンターの出現により、賑わっていた旧商店街が対応を迫られているのは、日本全国共通の課題だ。

多くの観光客を集める、勇壮な火祭り「松明あかし」は、400 年前に、伊達正宗によ

って滅ぼされた須賀川城城主、二階堂家の家臣の霊を慰める伝統の行事だという。映画は、この巨大な松明を燃やす火祭りを見せながら、伝統と近代化の調和のもとに須賀川市の発展を求めたいと結んでいる。

滅ぼされた須賀川城の本丸跡には、須賀川城址として「二階堂神社」が建てられている。

### 『須賀川、復興への歩み』 日本、2018 年、ドキュメンタリー、25 分

この作品は、2 代目の金山プロダクションが、大震災直後から、復興への取り組みを 6 年間にわたって記録したドキュメンタリーである。

2011 年 3 月 11 日、須賀川市は、震度 6 強の強い揺れに襲われ、ダムの決壊、建物や道路の破壊など、大きな被害を被った。さらに、福島第一原発の重大事故により、放射線という目に見えない不安と戦いながら、復興への希望を行動に変えた。

最初に映画は被害の映像を映し出す。瓦屋根の古民家は横倒しにつぶれて、上に屋根だけが乗っている。4 階建ての鉄筋コンクリートのビルは半分が崩れ落ちている。鉄筋コンクリートの須賀川市庁舎は、至る所にひび割れが入り使えない。須賀川市第一小学校の運動場が、何と半分以上にわたって深く陥没している。校舎には亀裂が入り、窓越しに見ると、教室の調度品などは地震当時のまま散乱し、時が止まっている。

須賀川は内陸なので、津波の被害はなかったが、間接的な水害で男女 7 人が犠牲になっている。どのような水害かというと、当時ほぼ完成した藤沼湖ダムには満水近く水が溜まっていた。地震の揺れでダムが決壊して、150 万トンの水が濁流となって一気に河を下り、下流の集落に押し寄せたのだ。

須賀川は、放射線による直接の被爆はなかったが、恐ろしいのは風評被害である。米を始め野菜などの農産物は厳重な放射線検査をして、沈静化に努めている。驚いたことに、福島産の農産物の輸入を未だに禁止しているアジアの近隣国があるのは情けないことだ。

早々に復興の重機が動きだし、決壊した藤沼湖ダムにはクレーン車が入り、市庁舎も解体され新庁舎の建設が始まった。新庁舎には、大きなゴム製の免震装置が組み込まれて万全を期している。

『～須賀川市の 30 年』で紹介された「二階堂神社」も、ひのき造りで建て直された。神社役員のインタビューでは、立て替えの費用を寄付で募集したら、予想以上に集まったと嬉しそうな顔。

この新築なった、総ひのき造りのまぶしい二階堂神社で、「松明あかし」の火を頂く「御神火奉受式」式が行われ、伝統の火祭りが行われる。

2017 年 3 月、新庁舎が完成、橋本克也市長は、復興から発展へ、「選ばれる町」の実現を目指す。住む人に選ばれ、働く人に選ばれ、育てる人に選ばれることを願う、と抱負を語っている。

映画は終盤になって、伝統行事「松明あかし」の実況映像となり、無数の松明の炎が夜空を照らし、人々は「松明あかし」が復活した喜びに浸っている。

### 『蒔絵 室瀬和美 時を超える美』 日本、2017 年、ドキュメンタリー、39 分

この映画祭では、日本の伝統工芸を記録した作品が毎回上映される。筆者は、それらの作品を観るたびにその“わざ”のすばらしさに感心する。

この作品は、公益財団法人ポーラ伝統文化振興財団が企画し、株式会社毎日映画社が製作している。

この映画の主演である室瀬和美さんは、平成 20 年に、重要無形文化財「蒔絵」保持者に認定された、いわば人間国宝である。

千年以上の歴史を持つ蒔絵の源流は奈良時代までさかのぼるといふ。やがて海外との交易が始まり、オランダをはじめ、ヨーロッパに渡る。日本で特権階級のために作られた超高級作品が、ジャパンと呼ばれて人々を魅了し、それらが今でも美術館に残っているという。

蒔絵の制作工程は、気が遠くなるような根気の連続である。良質の漆を得るために、岩手県の漆の森に通い、その栽培者と共に

見守っている。先ずは良い原料を確保するというのは、伝統工芸共通の原点だ。

新たな作品の創作が始まり、その工程が紹介される。樹齢200年を超える松の生地から作られた丸篋（箱）、補強の麻布を貼り、その上に漆で下塗りを繰り返す。

公園に行きスケッチをしていると、リスが恐れる事なく、室瀬さんの懐や背中にとまって戯れる、この人懐っこいリスが今回のテーマになる。

丸篋の蓋に、レッドオークの葉を敷き詰めるように描き、そのオークの葉の上に、5匹のリスを円周状に配し、さらにリスの好物どんぐりを配している。リスという動物を使いながら装飾的な美しい模様だ。

室瀬さんは、新しい素材にも挑戦する。どんぐりの袴には鉛の板、実の方にはチタンという近代的な金属板を使って独特の質感を出している。主役であるリスには、沖縄産の夜光貝を使って、螺鈿細工のような輝きを与えている。

これらを漆で貼り付け、金粉で陰影をつけて磨き、また金粉を散らし、漆を塗って磨く作業を繰り返す。金粉は細目から荒目まで3種類を使い分け、輝き具合を調整する。このように丹念な作業を1年以上もかけて完成したのが『蒔絵螺鈿丸篋「秋奏」』である。

最後に、この丸篋の中にオルゴールを組み込んで、現代的なセンスの蒔絵作品が出来上がった。

室瀬さんは、英国の博物館に行き、日本から渡った蒔絵作品の補修作業を指導したり、日本では若い後継者の育成にも活動している。

**『平成28年度工芸技術 記録映画「竹工芸～藤沼昇の技」』** 日本、2017年、ドキュメンタリー、35分

これは文化庁の企画で、(株)毎日映画社が製作した作品で、何と35ミリのフィルムによる撮影である。

この作品の主役は、工芸作家の藤沼昇で、平成24年、重要無形文化財「竹工芸」の保持者に認定されている人間国宝である。

竹が持っている潜在能力は、繊細さ、強

靱さなど、我々が考える以上の「エナジー」を持っている。私自身のエナジーを合体させた時に、人に何かを伝えられるという気持を持って、もう40年近く制作に関わっている。映画は藤沼氏自身によるこの語りで始まる。

栃木県大田原市、風になびいて大きくうねる竹林の映像が映される。この地域は寒暖の差が大きく、強靱な竹が採れるという。藤沼氏はこの地に生まれ育っており、まさに竹工芸の好材料が身近にあるのだ。

作品群が紹介される、細い竹ひごで編んだ極々繊細なお盆から、太い竹ひごでざっくりと編んだ力強い花かごまで、竹の持つ表現能力に驚く。

新たな作品を作る。先ず頭に浮かんだイメージをスケッチにする。竹の力強さと繊細さを併せ持つ二重構造の花かごが、具体的な図面として描かれる。

材料は、近くにある専用の竹林から、目的に合った竹を伐採して保存してある。この中から選んだ原竹を縦割りにして、細い竹ひごに仕上げていく。用途と目的に合った、様々な異なる竹ひご作りは、制作日数の半分を占めるほどの重要な作業だ。

用途に応じて竹ひごの色を染めて、編みに入る。指先の動きに応じて、魔法のように竹ひごが動いて造形に変わってゆく。内側に細い竹ひごで編んだ花瓶を支える黒いかご、外側には、赤く染めた太い竹ひごで、うねるような曲線が絡み合う造形が完成した。

完成した作品名は、《束編花籃「宝珠」》力強い炎を感じさせる。実用価値と工芸作品とが調和している。

人間国宝の制作工程が克明に記録されているので、遺産としても価値が高く、貴重な記録映像だと思う。

**『Forest Guards 森の番人』** ラトビア、2015年、アニメーション、12分

この作品は、いかにもロシア人形の血を引いた大らかで可愛い人形のアニメーションである。

製作国は「ラトビア」、多分この映画祭では初参加だと思う。バルト海の東岸にあり、

東はロシアに接している。ロシア帝国時代に独立して以来、旧ソヴィエトとドイツから繰り返し占領されるという歴史を経て、現在では東にロシアと接する北欧のEU加盟国だ。

このアニメーションを見ると、やはり大国ロシア庶民のセンスか、大らかで人間臭く、観る者を心豊かにしてくれる12分の小品である。この作品にはセリフもナレーションもないが、それがかえって楽しい。

主役は年老いた森林保安官で、森のはずれの小さな丸太小屋に住んでいるが、愛犬とネコと、仲間に入れないネズミも同居だ。爺さんの日課は愛犬とネコを連れ、コルク銃を持って森を見回ることだ。

ある日、町の紳士が車で生活ゴミを森に捨てて行った。それが度々続くが犯人を捕まえられない。それを知ったネズミが知恵を出して仲間について行き、ゴミをひもで数珠つなぎにして犯人の車に結ぶ。犯人は知らずにゴミを引きずって町を走ると、警官から御用になり、罰として、囚人服の姿で町の清掃を命じられる。

一方、爺さんの小屋では、ネズミの行為が認められて、愛犬とネコの仲間に入れてもらい、対等にえさをもらって、ハッピーエンドとなる心温まるアニメ。

## ☆あとがき

今回は30周年の特別企画が充実して、この節目に相応しい映画祭であった。須賀川市の今昔を語る記録映画が2本上映されたのも有意義であった。特に東日本大震災以降の須賀川市の復興ぶりには、須賀川に通った筆者も、肌で感じるような力強さを感じた。

Syuichi Nakayama  
日本映画テレビ技術協会名誉会員